

学 位 請 求 論 文 要 旨

東アジアにおける茶文化の伝播に関する研究

2022年6月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

趙 芸

陸羽（733-804）が『茶経』（780）で「茶之為飲，発乎神農氏，聞于魯周公」と記したように、茶は神農時代に茶樹の葉を摘んで飲料とされ、このことが魯・周公（B.C.1100-?）の時代になって記録されたようである。中国における喫茶法は、時代に合わせて概略3段階に分けられる。それは、唐代の「煎茶法」、宋代の「点茶法」、明代の「泡茶法」である。すなわち唐代の「団茶を煮る」、宋代の「粉茶をかき回す」、明代の「葉茶を浸す」というやり方である。

日本茶道の源流は、中国唐代の陸羽（733-804）及び、その時代の僧侶や文人たちに求められる。その後、日本では宋代の「点茶法」が受け継がれ、千利休（1521-91）によって日本茶道である「茶の湯」が大成される。中国から招来された「点茶法」は日本では「茶の湯」へと発展したが、地理的に近く、より緊密な交流の歴史が長い朝鮮では定着することはなかった。これまでの日本や朝鮮、中国の茶文化に関する研究は、ほとんどが一国（地域）を対象とするものであり、比較という視点は欠いている。本論文では、これらの点に関する問題意識を起点とし、東アジア全体を見渡しながらか、東アジアの核地域として認識される日本・中国・朝鮮における茶文化変遷、変容を明らかにすることを貫徹させた。

東アジア全体という視点から、中国における茶文化の形成及び発展を踏まえて、朝鮮・日本への茶文化の伝播、そしてそれぞれの変遷について分析、比較検討したことによる成果は、概ね以下の3点にまとめられる。

第一は、第1章から第5章を通じて、東アジアの茶文化全体像を描出したことである。まずは、中国において茶文化がどのように生成発展し、どのようにして朝鮮及び日本へ伝えられ、そして変容したかについて明らかにした。続いて、日本及び朝鮮における初茶書の様相を明らかにする。日本の初茶書と原典、朝鮮の初茶書と原典を各々に比較検討して相違点を明らかにした上で、初茶書同士の比較を通してそれぞれの特色を明らかにし、朝鮮の茶書が著わしく遅れて登場した背景について論じた。さらに、入宋・入元した日本及び朝鮮の留学僧の足跡をたどりながら、日本及び朝鮮の僧侶たちが優れた才能と流暢な漢詩文の技能を備えていたことを明らかにした。彼らは互いに出会い、そして中国やインド等の僧侶や文士、官僚たちにも出会い、漢詩文を通して禅と茶の世界において心置きなく交流していたのである。

第二は、第6章において、茶文化の伝播に関わる朝鮮と日本の相違を明らかにしたことである。その第一点は、朝鮮と日本は茶文化の伝播時期が異なる。朝鮮は地理的にも政治的にも中国との繋がりが強く、中国の喫茶法が日本よりも早く伝えられたのである。第二点は、伝えられた喫茶法の伝承のされ方にみる相違である。朝鮮に伝播した中国の「点茶法」は伝承され、発展することはなかったが、日本では発展的な変容を遂げることとなる。第三点は、喫茶法の招来に関与した人物像の相違である。日本への招来には日本人、中国人を問わず僧侶が関与し、朝鮮の場合は僧侶以外に使節や士人等も関与した。第四点は、初茶書の内容にみる相違である。日本の初茶書には唐・宋代の茶書及び漢方医学書等から

の引用が多くみられ、唐・宋代の喫茶法を主体とする、儒教や道家思想の影響をも受けた宗教医学体系の書物と言える。これに対して、朝鮮の初茶書は明・清代の中国茶書からの引用を基本とし、従って明代の喫茶法である「泡茶法」に関する専門茶書にほかならない。

第三は、中国、朝鮮、日本における茶文化の発展や伝播の過程を通して、茶文化の伝播を可能にする5点の基本原則を明らかにした。その第一点は、政治的な支持と協力があったこそ、茶文化の発展は促進されたということである。第二点は、国家としての経済力が成長あるいは安定していたからこそ茶業への投資が促され、茶文化もまた発展し得たということである。第三点は、戦乱や社会不安に終止符が打たれ、治安の維持を実現し得る安定的な政治権力の確立こそが、茶文化の発展と伝播には欠かせないということである。第四点は、茶文化の発展と伝播は、宗教と深い関係を持つということである。第五点は、茶文化の伝播には、僧侶が特に重要な役割を果たしたということである。

本論文は、序章と終章を除いて6章からなる。

第1章では、中国の各時代における喫茶法の全体像を明らかにした上で、その喫茶法がそれぞれに朝鮮と日本へ伝播し、どのように変容したかについて整理した。唐代から五代十国、宋代、元代、明代までという時代の大枠を踏まえて、各時代の喫茶法、代表的な茶書、茶の淹れ方、茶の加工・生産等について整理した。特に重要で代表的な喫茶法は、唐代の「煎茶法」、宋代の「点茶法」、明代の「泡茶法」であり、茶書や茶詩の点数等から茶文化が普及、発展した度合いを推し量ることができる。特に五代十国は激しい動乱の時代であったにも関わらず、喫茶法は衰滅することなく保持された。だからこそ、宋代へと茶文化は伝承され、興隆期を迎えることができたのである。五代十国時代に茶文化が衰滅しなかったのは、禅宗との繋がりや政権の支持によるところが大きい。北宋代は貢茶である「団茶」がよく知られ、南宋代には「散茶」に重きが置かれるようになる。しかしながら、元代になる頃までには「散茶」が「団茶」を圧倒するようになった。元代には「団茶」は廃れてしまい、一方で「散茶」の生産はより活発になり、茗茶、散茶、団茶という3種類の茶が並存することとなった。明代には「散茶」が貢茶とされたため、宋代の「点茶法」は既に廃れ、「泡茶法」が全面的な発展に向かう。すなわち元代は、「団茶」から「散茶」への一大転換期となったのである。

朝鮮の茶に関する史料に基づくと、朝鮮の方が日本よりも早く中国茶が伝えられたことが分かる。喫茶法は統一新羅時代に唐代の「煎茶法」、高麗時代に宋代の「点茶法」、李朝時代には明代の「泡茶法」という形で、各時代の喫茶法が大きく3段階に分かれて朝鮮へと伝えられたのである。このような時間的枠組みを踏まえて、喫茶法や茶具、茶書、茶礼等が定着していく様相を明らかにした。

中国茶の喫茶法は、日本へは平安時代に唐代の「煎茶法」、鎌倉時代に宋代の「点茶法」、江戸時代には明代の「泡茶法」という形で、朝鮮と同様に、大きく3段階に分かれて伝えられた。日本に茶文化を伝えた人物や伝播のルートについては時代別に明らかにしたが、

茶文化の伝播ルートに関しては朝鮮経由の可能性についても言及した。

第2章では、2度の入宋を果たした栄西による日本の初茶書『喫茶養生記』について分析し、栄西及び『喫茶養生記』が宋代喫茶法の伝播・普及に及ぼした影響や貢献について論じた。日本人僧侶の最澄と空海が相次いで入唐し、帰国する際に茶の種子を持ち帰って日本で植え付けたが、茶の栽培はそれほど活発にはならなかった。栄西の2度目の入宋と帰国を境に、日本では茶文化が急速に普及したことから、この点に焦点を当てて栄西の貢献を明らかにした。栄西が著わした『喫茶養生記』上巻は『茶経』からの引用を14箇所を確認でき、他の書物や宋代茶文化から受けた影響について考察を加えた。同下巻では漢方医学の古典に依拠して病気を治癒する桑の効用について論じ、道家思想や仏教思想、儒教思想が桑に付与した意味合いを明らかにした。栄西は「座禅を通して自分を修めること」と「飲茶を通して心を養うこと」を結び付けて、内外の養生方法を確立した。また、栄西は新興武士層の支持を得たことで、鎌倉幕府の支援や庇護を受けただけではなく、後鳥羽天皇と近い関係を保っていたため、宗像社本家八条院より経済支援も得たことが窺える。栄西は、薬効のある喫茶を養生手法の基本とする。「養生に効果的」という考え方は貴族層や一般民衆に好感し、幕府や上層階級はもとより、一般民衆にも広く受け入れられることとなり、結果として茶文化の普及に大きく寄与することとなったことを明らかにした。

第3章では、日本の初茶書とは異なる視点から朝鮮の初茶書を分析した。ところで朝鮮の初茶書『茶神伝』は、草衣禪師が『万宝全書』に収められた『採茶論』を謄写したとされるが、その『採茶論』は明代の張源による『茶録』を謄写したものであることから、これら3茶書を詳細に比較することで枢要な相違点を明らかにした。まず『茶録』と『採茶論』を比較したところ99箇所で見違を確認したが、うち78箇所は『採茶論』のまま『茶神伝』に継承された。ところが残りの21箇所のうち17箇所は、『茶神伝』では『茶録』と同じ表記・表現とされており、『茶神伝』は『採茶論』のみならず『茶録』も参照していたことを突き止めた。そして、これらの比較検討を通して、草衣禪師は必ずしも『茶録』一辺倒ではなく、味よりも香りを強調する姿勢を打ち出していたことを確認した。この点、『茶神伝』だけではなく『東茶頌』の中でも香りについて強調している。また、茶人を指す「茶家」は、『茶神伝』では茶を淹れる人を指す「烹家」とされており、19世紀になっても朝鮮には「茶家」と呼ぶにふさわしい茶人が現われなかったことから意図的に置き換えた草衣禪師の無念さを推し量ることができる。

朝鮮の初茶書『茶神伝』は、日本の初茶書『喫茶養生記』より600余年も遅れて登場する。朝鮮と日本の初茶書の比較を通して、19世紀になってようやく朝鮮の初茶書が形をなした背景を明らかにした。まず、李朝時代は政権が仏教を抑制したことにより、仏教と近い関係を有した茶文化は衰退を余儀なくされた。そして、庶民にとって高嶺の花であった茶よりも安くて簡単に手に入れやすい飲み物があつたため、無理を押して飲茶文化を普及、伝承する必要はなかったのである。さらに、政権や権威の支持を得ながら飲茶風習の普及を重んじる栄西のような人物が、朝鮮には遂に登場しなかったことの影響も看過でき

ない。

第4章では、高麗時代に入宋・入元した留学僧たちの茶詩を通して、それぞれが過ごした宋代・元代の茶文化との関りを明らかにした。高麗時代の高僧とされた53人のうち19人が中国へ留学し、特に優れた業績を遺したのは大覚義天・太古普愚・懶翁慧勤の3人である。彼らは帰国後に国師や王師となり、いずれも茶詩や茶歌を遺した。彼らの茶詩からは、高麗への帰国に際して、中国で学んだ禅宗だけではなく、既に流行っていた喫茶文化も併せて持ち帰ったことが窺い知れる。すなわち、彼ら自身の能力や業績ゆえに国師や王師という立場に立ち得たからこそ、持ち帰った茶文化を普及、定着させることができたのである。この時代には、儒教と仏教は摩擦や衝突を起こすことなく良好な関係を維持していた。むしろ儒者たちは寺院に出入りして詩を唱和するなど、茶文化に親しんでいたことを確認できた。加えて、当時の茶詩の収集や内容把握の過程において、高麗末期の高僧たちが中国や日本、インド等の僧侶たちと出会い、漢詩文を介して心置きなく交流し合っていたことも明らかにできた。

第5章では、平安後期・鎌倉時代に入宋・入元した4人の日本人留学僧と茶文化の関りについて論じた。日本と中国の正式な国交は、895年から中断されたままの状況に置かれていたため、当時は密航という形で入宋・入元する僧侶が増え始めた。入宋した成尋がその一人で、結果的には帰国せずに宋で亡くなったが、彼が著わした『参天台五台山記』は弟子によって日本へもたらされる。そこには宋代の喫茶文化に関する記載があることから、これによって日本でも飲茶風習について知ることはできたと推測できる。2度にわたって入宋した栄西は、宋代の茶文化を日本へもたらした重要な人物であるが、第2章で詳しく取り上げたため第5章では簡単な記述に留めた。雪村友梅と天岸慧広は鎌倉時代に入元した僧侶で、雪村友梅は『岷峨集』、天岸慧広は『東帰集』を著わした。元代の茶文化に関しては、彼らが書き遺した茶詩を通して知ることができる。また、これらの漢詩を通して彼らの元滞在中の様子も窺い知れる。中国へ留学した日本人僧侶の漢詩文は相当な高水準に達するもので、帰国後に彼らは五山文学の中核として活動し、日本における中世漢文学の発展を牽引した。

要するに第4章と5章では、留学僧が創った茶詩・茶歌を介して、中国へ留学した日本と朝鮮の高僧たちは優れた才能と流暢な漢詩文の技能を身に付け、それぞれに中国や日本、朝鮮、インド等の僧侶や文士、官僚等に出会い、交流していたことを明らかにしたのである。

第6章では、中国・朝鮮・日本の茶文化がそれぞれに発展し、今日の茶芸・茶道・茶礼へと変容し定着していく様相についてまとめ、特に中国における茶文化の発展が、朝鮮と日本への伝播に及ぼした影響について明らかにした。そして、東アジア全体に視野を広げて中国茶文化の発展要因を明らかにした上で、朝鮮及び日本へ伝播した茶文化が変容していく流れを整理した。さらに伝播の過程で生じた朝鮮と日本の相違や、それぞれの特色についても論じた。朝鮮と日本の茶文化伝播に関する相違は大きく4点にまとめられる。そ

これは、それぞれに伝播した時期の相違、定着した喫茶法の相違、茶書が出現した時期と内容の相違、伝播に携わった担い手の相違である。

また、東アジアにおける茶文化の普及及び発展、伝播には、政治、経済、社会、宗教、そして人物という5大要素が様々な影響関係を持ちながら主体的な役割を果たしたことを究明した。その第一点は、政治的な支持と協力があってこそ、茶文化の発展は促進されたということである。逆に、政治的な支持が得られなければ、中国の明代や朝鮮の李朝時代のように、茶文化の発展は制約あるいは阻害されてしまう。第二点は、国としての経済力が成長あるいは安定していたからこそ茶業への投資が促され、茶文化もまた発展し得たということである。一方で、茶文化の発展は、茶税等による財政収入の増加あるいは安定化をもたらすという意味で、実は表裏の関係をなしていたのである。第三点は、戦乱や社会不安に終止符が打たれ、治安の維持を実現し得る安定的な政治権力の確立こそが、茶文化の発展と伝播には欠かせないということである。第四点は、茶文化の発展と伝播は、宗教と深い関係を持つということである。特に、禅宗の修得を目的とする僧侶たちは、帰国に合わせて禅宗だけではなく茶文化も持ち帰ることとなる。両者は本来的に密接な関係を持っていたからであるが、加えて儒教や道教、道家思想も茶文化と関連づけられることで普及・発展の可能性を押し広げていく。第五点は、茶文化の伝播には、僧侶が特に重要な役割を果たしたということである。この点、広く茶文化の担い手という観点からまとめると、中国は皇族、僧侶、学士等士人、詩人等、朝鮮は王族、僧侶、儒者等、日本は皇族、将軍、僧侶等というように、それぞれの国情や特色が垣間見える。

本論文は、対象とする時間幅を広げることで長期的な視点を可能な限り活かし、また、対象とする空間を広げることで物理的な要件や国情の相違等にも目配りしながら茶文化の本質に迫ることを企図した。入手可能な情報には限りがあり、中国、朝鮮、日本に絞り込んだ東アジアという枠組みではあるが、先行研究の多くが1国内あるいは2国間とされてきたことを念頭に、これとは異なる視点から論じた点に本論の独自性がある。